

各関係機関の長
各病害虫防除員 殿

宮崎県病害虫防除・肥料検査センター所長

平成 2 3 年度病害虫発生予報第 7 号について

平成 2 3 年度病害虫発生予報第 7 号を発表したので送付します。

平成 2 3 年度病害虫発生予報第 7 号

向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

発生予報の概要

作物名	病害虫名	発生量の 平年比	記載ページ
施設野菜全般	1 アブラムシ類	やや多	2
	2 ハスモンヨトウ	やや多	2
	3 タバココナジラミ類 (ハ'イタイ' B (シルハ'-リ-フナジ'ラミ)及びハ'イタイ' Q)	やや多	3
冬春きゅうり	1 ベと病	並	3
	2 うどんこ病	やや多	3
	3 褐斑病	並	3
	4 黄化えそ病		4
	5 ミナミキイロアザミウマ	並	4
冬春ピーマン	1 斑点病	やや多	4
	2 うどんこ病	並	4
	3 ミナミキイロアザミウマ	並	5
冬春トマト	1 葉かび病	並	5
	2 トマト黄化葉巻病 (TYLCV)	前年、前々年より多い	5
	3 タバココナジラミ類	やや多	5
冬春いちご	1 うどんこ病	やや多	5
	2 炭疽病	やや多	5
	3 ハダニ類	やや多	6
	4 アブラムシ類	やや多	6
	5 コナジラミ類		6
かんきつ類 (露地栽培)	1 ミカンハダニ	並	6
茶	1 カンザワハダニ	並	6

は注意報を発表中

作物の生育状況 (10月中旬)

冬春きゅうり、冬春ピーマン、冬春トマト、冬春いちごは定植～生育初期、うんしゅうみかんは収穫期、中晩柑(日向夏)は果実肥大期、茶は秋芽生育期であった。

向こう1か月の気象予報

天気は数日の周期で変わり、平年に比べ曇りや雨の日が多く、気温は平年並または高い確率ともに40%、降水量は平年並または多い確率ともに40%、日照時間は平年並または少ない確率ともに40%と予想されています。

(1か月予報 鹿児島地方気象台10/21発表)

発生予報の根拠および防除対策

施設野菜全般

1 アブラムシ類 (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 10月中旬の巡回調査における冬春いちごの発生面積率61.6% (平年35.4%) は平年よりやや多、寄生株率20.2% (平年6.5%) は平年より多である。
- (2) 冬春きゅうり、冬春ピーマンは発生未確認である (平年の発生面積率 : きゅうり0.8%、ピーマン0.0%)。
- (3) 黄色水盤での誘殺数 (佐土原) は、10月第2半旬以降平年より多い状況で推移している。

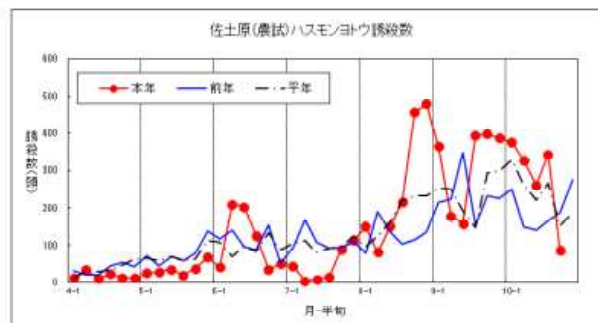
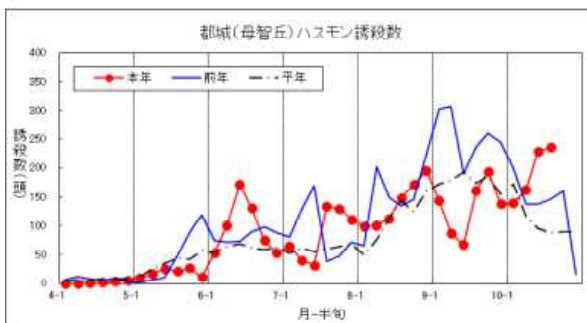
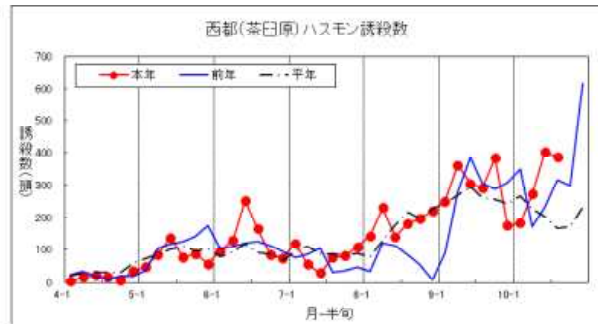
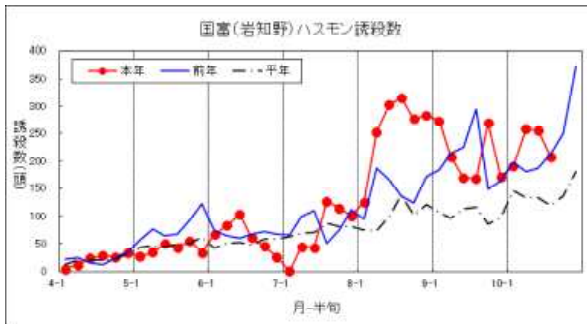
[防除上の注意]

- (1) きゅうりやピーマン等多くの作物でウイルス病を媒介するので、有翅虫の飛来防止に努めるとともに、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を定期的に行う。

2 ハスモンヨトウ (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 10月中旬の巡回調査における冬春きゅうりの発生面積率26.7% (平年32.5%)、被害葉率1.3% (平年0.9%) はいずれも平年並である。
- (2) 冬春ピーマンの発生面積率28.6% (平年22.2%) は平年よりやや多、被害株率0.6% (平年1.0%) は平年並である。
- (3) 冬春トマトの発生面積率33.3% (平年16.3%) は平年よりやや多、被害株率0.3% (平年0.6%) は平年並である。
- (4) 冬春いちごの発生面積率38.5% (平年52.0%) は平年よりやや少、寄生株率1.7% (平年4.5%) は平年並である。
- (5) フェロモントラップの誘殺数は、10月第2半旬以降平年より多い状況で推移している。



[防除上の注意]

- (1) 幼虫が大きくなると薬剤が効きにくくなるので、早期発見に努め若令幼虫期に防除する。
- (2) 施設内で発生すると、天敵類が少ないことや施設内気温が高いことから、増殖しやすくなるので注意が必要である。

3 タバココナジラミ類（*B. tabaci* B(シムリ-リコナジラミ)及び*B. tabaci* Q) (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 10月中旬の巡回調査における冬春きゅうりの発生面積率73.3% (平年56.0%) は平年よりやや多、100葉虫数13.4頭 (平年5.8頭) は平年より多である。
- (2) 冬春ピーマンの発生面積率71.3% (平均41.4%)、100葉虫数24.3頭 (平均1.8頭) はいずれもこの10年間で最も多い。
- (3) 冬春トマトの発生面積率55.6% (平年37.2%) は平年よりやや多、100葉虫数1.8頭 (平年1.9頭) は平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 施設開口部には必ず防虫ネットを設置して、施設内への侵入を防止する。設置する防虫ネットは、目合い0.4mm以下のものが有効である。
- (2) 施設内には黄色粘着板等を設置し、早期発見に努めるとともに本虫の密度を抑制する。
- (3) 多発してからでは防除が難しくなるので、発生を確認したら早めに防除する。なお、薬剤散布後は防除効果に注意を払い、必要に応じて適宜追加防除を行う。
- (4) 施設内外の雑草は、タバココナジラミ類の寄主となるので除草を徹底する。また、施設内では栽培目的以外の不要な作物や観葉植物等は栽培しない。

冬春きゅうり

1 ベと病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 10月中旬の巡回調査における発生面積率13.3% (平年8.6%)、発病葉率0.1% (平年0.9%) はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 湿度が高いときに発生しやすく、激発すると防除が困難となるので、予防散布に重点をおき発生が見られたら初期防除を徹底する。
- (2) 窒素切れや草勢の衰えは発生を助長するので、肥料切れしないように肥培管理に注意する。

2 うどんこ病 (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 10月中旬の発生面積率40.0% (平年22.2%)、発病葉率2.0% (平年1.5%) はいずれも平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- (1) 病勢が進展してからでは防除効果が低くなるので、発病を確認したら早めに防除する。
- (2) 耐性菌を生じやすいので、同一系統薬剤の連続散布を避ける。
- (3) 乾燥時に多発するので、ほ場が過乾燥にならないように管理に注意する。

3 褐斑病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 10月中旬の巡回調査では、15圃場のうち1圃場で微発生^(注)(発病葉率0.5%未滿) を確認している。

(平年値 : 発生面積率8.0%、発病葉率0.9%)

[防除上の注意]

- (1) 多発してからの防除は困難なので、初期防除を徹底する。
- (2) 窒素質肥料の多用は発病を助長するが、逆に少ないと草勢の低下を招くので、適正な肥培管理に努める。

- (3) 摘除した罹病葉は、ほ場外に持ち出し処分する。
- (4) ベと病やうどんこ病の発生後に激発することがあるので、本病以外の病害の発生に注意する。

4 黄化えそ病 (MYSV)

平成23年度病害虫発生予察注意報第4号(10月20日発表)

[防除上の注意]

- (1) キュウリ黄化えそ病(MYSV)が施設栽培等で確認され、徐々に拡大傾向にあることから、今後、現在未発生地域やこれから栽培が始まる作型や他のウリ科作物への感染の拡大が懸念される。詳細については、平成23年度病害虫発生予察注意報第4号(10月20日発表)を参照のこと。
- (2) 本病はミナミキイロアザミウマによって永続的に伝搬されるため、発生後は急激に圃場内外に蔓延する恐れがある。ミナミキイロアザミウマの防除対策については、次項を参照のこと。
- (3) 感染株を確認した場合は、速やかに罹病株を抜き取り、圃場外に持ち出し埋却処分するか、ビニール袋等に入れて完全に枯れるまで密封処理する。
- (4) 本病と疑われる症状が発生した場合は、西臼杵支庁・農林振興局(農業改良普及センター)または病害虫防除・肥料検査センターまで連絡する。

5 ミナミキイロアザミウマ (並)

[予報の根拠]

- (1) 10月中旬の巡回調査では、15圃場のうち2圃場で微発生^(注)(葉当たり虫数0.5頭未満)が確認されている。
(平年値：発生面積率0.0%、葉当たり虫数0.01%)

[防除上の注意]

- (1) 最近、キュウリ黄化えそ病を媒介する本虫に対し、各種薬剤の感受性低下が顕著となっており、多発してからでは防除が難しくなるので、低密度のうちに防除する。
- (2) 本虫の施設への侵入を防ぐため、開口部に0.4mm以下の防虫ネットを必ず設置するとともに、近紫外線カットフィルム等の物理的防除手段を利用する。
- (3) 本虫の土中や地表面での蛹化を防止するためのマルチ被覆や誘殺のための青色粘着板の設置等、総合的な防除対策を講じる。

冬春ピーマン

1 斑点病 (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 10月中旬の巡回調査における発生面積率7.1%(平年0.7%)、発病葉率0.4%(平年0.0%)はいずれも平年より多である。

[防除上の注意]

- (1) 多湿条件で発生しやすいので、除湿に努める。
- (2) 病原菌が侵入した後の防除効果は低いので、予防散布を行う。

2 うどんこ病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 10月中旬の巡回調査では、14圃場のうち2圃場で微発生^(注)(発病葉率0.5%未満)を確認している。
(平年値：発生面積率4.7%、発病葉率0.1%)

[防除上の注意]

- (1) 乾燥した条件で発生しやすいので、乾燥させすぎないようにする。
- (2) 病勢が進展してからでは防除効果が低いので早期発見に努め、発病を確認したら早めに防除する。

3 ミナミキイロアザミウマ (並)

[予報の根拠]

(1) 10月中旬の花での見取り調査における発生面積率21.4% (平年25.1%)、10花当り寄生虫数0.4頭 (平年0.6頭) はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

(1) 10花当り寄生虫数が1頭から被害果が出始める。また、多発してからでは防除が難しくなるので、低密度のうちに防除を徹底する。

(2) マルチ被覆や誘殺のための青色粘着板の設置により、生育密度の抑制に努める。

冬春トマト

1 葉かび病 (並)

[予報の根拠]

(1) 10月中旬の巡回調査では発生未確認である。

(平年値：発生面積率1.4%、発病葉率0.01%)

[防除上の注意]

(1) 多湿条件で発生しやすいので、ハウスの換気を良くする。

(2) 発病初期の防除を徹底する。

2 トマト黄化葉巻病 (TYLCV) (前年、前々年より多い)

[予報の根拠]

(1) 10月中旬の発生面積率44.4% (H22：0.0%、H21：0.0%)、発病株率0.22%

(H22：0.02%、H21：0.00%) はいずれも前年、前々年より多い。

[防除上の注意]

(1) 本病は、タバココナジラミ類により媒介され、生育初期に感染すると被害が激しく全滅する場合もあるので、発病株はすぐに抜き取り、速やかに埋却等適正に処理する。

3 タバココナジラミ類 (ハイトイブB(シハ'-リ-コナジラミ)及びハイトイブQ) (やや多)

[予報の根拠]

(1) 10月中旬の発生面積率55.6% (平年37.2%) は平年よりやや多、100葉虫数1.8頭 (平年1.9頭) は平年並である。

[防除上の注意]

施設野菜全般のタバココナジラミ類 (3 ページ) を参照のこと。

冬春いちご

1 うどんこ病 (やや多)

[予報の根拠]

(1) 10月中旬の発生面積率46.2% (平年15.1%) は平年より多、発病葉率5.1% (平年2.2%) は平年よりやや多である。

[防除上の注意]

(1) 初め葉裏に発生しやすいので早期発見に努め、初期防除を徹底する。

(2) 激しく発病すると防除効果が低くなるので、予防に重点をおき、発病後は散布間隔を短くするなど発病初期の防除を徹底する。

(3) 発病果など被害部は、伝染源になるので早めに取り除き、ほ場内に放置しない。

2 炭疽病 (やや多)

[予報の根拠]

(1) 10月中旬の発生面積率23.1% (平年12.6%)、発病株率2.7% (平年1.3%) はい

ずれも平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- (1) 多湿にならないよう、ほ場の排水対策を十分行う。
- (2) 定植後に発病した株は、早期に除去し、新たな感染を防止する。
- (3) 親株床の発病残渣は翌年の伝染源になるのでほ場外に持ち出し適正に処分する。

3 ハダニ類 (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 10月中旬の発生面積率61.6% (平年25.2%)、寄生株率14.0% (平年5.0%) はいずれも平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- (1) 寄生数が増加してからの防除は困難なので、密度が低い時点からの防除を徹底する。
- (2) ミツバチに影響のある農薬があるため、ミツバチを入れる前に防除の徹底を図るとともに、使用する農薬の選定に留意する。
- (3) 株整理後、葉数が少なくなった時期に薬剤散布を行うと防除効果が高くなる。
- (4) ダニ剤散布時は、葉裏に良くかかるようにていねいに散布する。
- (5) 薬剤感受性の低下を避けるため、系統の異なる農薬をローテーションで使用する。

4 アブラムシ類 (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 10月中旬の発生面積率61.6% (平年35.4%) は平年よりやや多、寄生株率20.2% (平年6.5%) は平年より多である。

[防除上の注意]

- (1) 寄生数が増加してからの防除は困難なので、密度が低い時点からの防除を徹底する。
- (2) ミツバチに影響のある農薬があるため、ミツバチを入れる前に防除の徹底を図るとともに、使用する農薬に留意する。

5 コナジラミ類

[防除上の注意]

- (1) 地域により薬剤感受性が低下したコナジラミ類の発生が確認されているので、地区の普及指導員や技術員の情報を参考にする。
- (2) 1回の防除では効果が低いので、連続散布を行う。

かんきつ類(露地栽培)

1 ミカンハダニ (並)

[予報の根拠]

- (1) 10月中旬の発生面積率38.9% (平年43.0%)、寄生葉率6.8% (平年8.2%) はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 生息密度が高くなると防除効果が劣るので、寄生葉率30%または1葉当たり虫数0.5~1頭を目安に、発生初期に防除を行う。
- (2) 薬剤感受性の低下を避けるため、同一系統薬剤の連用を避ける。

茶

1 カンザワハダニ (並)

[予報の根拠]

- (1) 10月中旬の発生面積率35.3% (平年35.2%)、寄生葉率1.6% (平年3.1%) はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 防除適期は越冬前の10月中下旬であるが、気象要因による変化が大きいので、茶園を観察して防除の必要性および時期を判断する。
- (2) 赤焼病の発生が懸念される茶園では、11月～12月中旬のマシン油乳剤の使用は発生を助長する恐れがあるので、秋冬期防霜終了後に散布し発病を抑制する。
- (3) 本県では、冬期においてもダニの繁殖が見られるため越冬前の防除がより重要であり、この時期の防除が十分でない翌年の一番茶への影響が大きい。
- (4) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のロ・テ・ション散布を実施する。

(注) 微発生とは、生息が確認されるが発生面積として換算する基準値に達しない密度の発生状況をいう。

その他

- 1 農薬適用の有無などについては次のホームページで確認する。
日本植物防疫協会ホームページ <http://jppn.ne.jp>
農林水産省ホームページ <http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/>
農林水産消費安全技術センターホームページ <http://www.acis.famic.go.jp/>
- 2 農薬の使用に当たっては、農薬使用基準の遵守並びに危被害の発生防止に努める。
- 3 発生量（程度）の区分
多 い （高 い） やや多いの外側10%の度数の入る幅
やや多い （やや高い） 平年並の外側20%の度数の入る幅
平年並 平年値を中心として40%の度数の入る幅
やや少ない （やや低い） 平年並の外側20%の度数の入る幅
少ない （低 い） やや少ないの外側10%の度数の入る幅
（平年値は過去10年間の平均）
- 4 予察情報の種類
病害虫防除・肥料検査センターから発表する情報は次の5つです。
 - (1) 予 報・・・向こう1か月の発生状況を予測し、毎月25日前後に発表する。
 - (2) 注 意 報・・・主要な病害虫の多発生が予想され、かつ早めに防除が必要な場合に発表する。
 - (3) 警 報・・・主要な病害虫の大発生が予想され、かつ緊急に防除が必要な場合に発表する。
 - (4) 特 殊 報・・・県内で初めて発生を認めた病害虫がある時や、病害虫の発生様相が特異な時に発表する。
 - (5) 防除情報・・・注意をうながす必要がある病害虫の発生状況や、各種の防除技術指導情報について随時発表する。

お知らせ

病害虫防除・肥料検査センターでは、ホームページで情報を提供しています。
ホームページアドレスは、<http://www.jppn.ne.jp/miyazaki/>です。

【文書取扱】 病害虫防除・肥料検査センター 生頼 TEL:0985-73-6670 FAX:0985-73-2127 E-mail: byogaichu-hiryo @pref.miyazaki.lg.jp
